
改稿・山吹の門

あんのーん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

改稿・山吹の門

【Nコード】

N6354L

【作者名】

あんのーん

【あらすじ】

中学2年の春休み。山吹の花を潜り異界へと迷い込んだ少年竣介は、そこで行方不明だった初恋の少女と再会する。

「川の向こうへ行きたいの……」
手をつなぎ、黄昏の国を旅するふたりを待つものは

全く恐くないホラー。2009年「春・花小説企画」参加作の改稿です。ほとんど推敲レベルではありませんが、いづらか読みやすくなつたのではないかと思えます。

旧作も残してありますので、読み比べてみたい、という方はぜひどうぞ。

01 (前書き)

あらずじでご案内した通り、昨年投稿しました「山吹の門」の改稿です。

当時は当方の準備不足により、我ながら不満の残る出来となり、もう少し書き直してみたい、という気持ちがありました。

多数のご意見ご感想、アドバイスをいただき、私なりに書き直してみました。

旧作を読んで下さった皆様、その節はどうもありがとうございます。

本編にもお気軽に感想などお聞かせいただけると嬉しいです。よろしく願います。

その日は朝から晴れていた。始業式の三日前。
中学二年の春休みが終わろうとしていた。

春休みの間中、僕は祖母の家にいた。三学期の終業式を終えると着替えもそこそこに、僕はひとりでここに来た。

「ごめんね竣介、お母さん、会社休めないから……」

朝、気忙しい朝食の席で、母は申し訳なさそうにそう言った。

「いいよ、別に。平気だから」

トーストをコーヒで喉に流し込みながら、そっけなく僕は答えた。実際、母親がいなければ何もできない歳でもなかった。

体は少し細めだけれど、運動部に所属していないわりにはしっかりしているほうだと思う。母と並べばすでに僕のほうが背も高く、もう子供には見えなかったはずだ。

特急と私鉄を乗り継いで三時間ほど行くと、古神こがみという駅に着く。駅を中心に古い町があり、その周辺には田圃が広がる、多分典型的な日本の一市町村だ。祖母はこの町の外れで独りで暮らしていた。

街並みは低く空は高く、自宅近くのような便利さはないけれどもんびりできる。もともと僕は、今住んでいるような騒々しい都会より田舎のほうが好きだった。この町には小学校の四年生までいたから馴染みもあるし知り合いもいて、特に生活に不便はなかったし、疎外感もなかった。むしろ自宅より居心地がよかつたくらいだ。僕はいわゆる鍵っ子で、この町にいた頃は、放課後を自宅よりも祖母の家で過ごすことのほうが多かった。祖母の家は平屋のボロ屋だったが僕は好きだったし、祖母のことも好きだった。

明日には母が僕を迎えに来る……それを思うと、僕の心は沈んだ。べつに迎えに来てもらわなくなつて、帰宅くらいひとりでできる。

だけど母には、祖母に報告しなければならぬことがあるはずだ
た。

祖母は出かけており、僕も気分転換に外に出た。祖母が飼ってい
る黒猫が靴箱の上に寝そべっている。それは物憂げに頭だけ上げて
僕を見送った。

祖母の家の庭からはとある里山が見える。僕はふと、その山に登
ってみよう、と思った。

辺りでは「御座山みくざい」と呼ばれているその山には、何度か祖母と登
ったことがある。僕がこの町に住んでいた頃、祖母の家の風呂は五
右衛門風呂だった。それで何度か、焚き付けの小枝を拾うのについ
て行ったのだ。

子供だったからどれだけの役にたったかはわからない。僕に
とっては遊びだった。御座山の頂上は木を払ってあり見晴らしがよ
く、彼方には海が白く光っていた。

山頂の中心には小さな祠があった。その傍らには一等三角点の古
い石柱もあり、ふたりでここで、遠く拡がる田圃や低い街並み、そ
して海と空を見ながらお握りを食べた。

しまった、おにぎりを作ってくればよかった……。

僕は少しばかり後悔した。本当に手ぶらで出て来てしまったから、
自販機の缶コーヒーすら買えなかった。だがもともと今回のハイキ
ングはただの思いつきだ。山頂でのんびり一休みしても、祖母の家
に戻るのに一時間もかからない。

その頃には祖母ももう帰っているだろう。祖母におにぎりを握っ
て貰おう。山の話をしながら、祖母とふたりで食べるのも悪くない。
明日はもう、帰らなくちゃいけないんだから。

「……………」

嫌なことを思い出してしまった。せつかく楽しくなっていたのに。
僕は振り切るように腕を大きく振り、明るい往来をずんずんと歩
いた。

町中の明るさに比べ、登山道はひんやりと薄暗かった。

この頃は登る人も少ないのだろう、記憶に残るそれより随分荒れている気がした。雑木が生い茂り、陽の光を遮っている。それでも歩いていると、じんわりと汗が出てきた。僕は着ていた薄手のジャケットを脱ぎ腰に縛りつけ、長袖のＴシャツの袖をまくり上げて額の汗を拭った。

ふと目の端に明るいものを捉え、僕はその方向を見た。

黄色い花。たくさん黄色い小さな花が涼しげに揺れている。薄暗い雑木林の中で、そこだけが明るく光る波のように見えた。

僕はまくった袖を下ろすと登山道を外れ、藪を漕ぎながらその花へと近づいた。

「……………」
それぞれの薄い花びらが木漏れ日を集め、透き通るように輝いている。僕はその花を知っていた。

山吹だ。一重の山吹。

子供の頃、祖母に教わったのだ。昔の子供はこの木の芯を抜いて、鉄砲玉にして遊んだということだった。

地味な遊びだな。その何が面白いんだろう

僕は多分当時と同じことをまた思った。それよりも花の美しさに心がいった。それは当時とは違ったことだ。幼い頃には山吹の花の美しさなんてわからなかった。

控えめだけど品のよい、艶やかな花。僕はふと、四年生のときに同じクラスだった女の子を思い出した。

たいそう綺麗な子だった。名前は木村伽耶子きむらがかやこといった。切れ長の瞳に小さな口、艶やかな前髪を眉の下辺りで切りそろえたおかつぱがとてもよく似合っていた。丁度肩にかかるくらいの長さの髪が、伽耶子のちよつとした仕草や動きに合わせてさらさらと揺れるのを、僕はいつもこっさり見ていた。

そうだ。僕は伽耶子が好きだった。

伽耶子はおとなしい、無口な女の子だった。クラスからは浮いて

いたと思う。伽耶子が友達と楽しそうにしているのを、僕は見たことがなかった。僕もまた友達のいない子供だったから、伽耶子のことか余計に気になったのかも知れない。僕たちはぼつぼつと言葉を交わすこともあった。

伽耶子が突然いなくなったのは、僕の家が引越す直前だ。

学校から一旦帰り、その後出かけてそのまま戻らなかった。田舎町は大騒ぎになり、警察はもとより、大人たちで捜索隊なども作つたはずだ。それでも伽耶子は帰らなかった。

なぜ今、伽耶子を思い出したのだろう。山吹の花が誘うように風に揺れていた。

山吹の木の根本にはちよつとした空間があり、僕はそこにしゃがみ込んだ。感傷が鼻の奥を突き上げてきて、僕は涙ぐんでいた。

ほのかに甘い匂いがした。多分、この花のものだろう。

僕はそのまま花を見上げた。目の上にある緑と黄色。それは陽の光を透かして瑞々しく、また涙ににじんで夢のように美しかった。僕はふとこの花に染まりたくなり、身を預けるように一面の枝垂れた花木に凭れかかった。

そのとき。

「うわあ……っ」

登山道側からはわからなかったが、向こう側はかなりきつい傾斜になっていた。山吹は僕を支えてくれず、僕は立木に引っかかりながらも、数メートルも転がり落ちたと思う。急に視界が開けた。

「……っつっ」

落ちたのは河原だった。僕は呻きながら体を丸め、しばらく蹲っていた。服は泥だらけだったが、打ち身と擦り傷の他にたいした怪我はなかった。

ようやく起きあがり顔を上げると、目の前に女の子の姿があった。

「……………」

「……………」

僕たちは茫然と見つめあった。

同い年くらいだろうか、小柄で色白の、ほっそりした綺麗な女の子だった。春らしい白っぽいワンピースに、生成のニットのカーデイガンを羽織っている。胸の辺りでさらさらと揺れる素直な髪、長い睫。漆黒の切れ長の瞳が吸い込まれそうに美しかった。

「だ……大丈夫……？」

小さな、形のよいピンクの唇が動いた。

「ああ、……うん」

もももごと答えると、僕は思わず俯いた。先の醜態を見られたかと思うと顔から火が出た。

「もしかして……竣介くん……？」

「僕は思わず顔を上げた。」

まさか……でも、やっぱり……やっぱり。

「木村……？」

女の子が微笑んだ。その笑みは先刻見た、山吹の花のように清楚で美しかった。

「やっぱり竣介くんなんだ　どうしたの？　なんでこんなところに来たの？」

その女の子　伽耶子が僕を、苗字ではなく名前で呼ぶのも以前の通りだ。僕の苗字は久下くげという、この町ではありふれたものだった。当時クラスにも久下姓の男子が僕を含めて三人もいて、区別のためにもっぱら渾名や下の名前で呼ばれていたのだ。

「ああ、うん」

頬が熱い。僕は赤らんだ頬を見られまいと、慌てて背後へと身を擦った。

「山吹を見てたら滑っちゃってさ」

語尾が頼りなく小さくなった。目線の先にあったのは林道だ。山でよく見る川沿いの、一段高くなったところに造られた林道。下から見上げて古い道だとわかる。だが僕は、御座山の登山道の近くにこんな道があるなんて知らなかった。先刻、山吹の前に立ったとき、なぜ真下のこの道に気づかなかったのだろう。川が流れている

と知ったのも初めてだった。

ちりちりと不安が背骨を這い登り、心臓を掴んだ。動悸が速くなり、息が苦しくなる。

何か、おかしくないか……？ 林道のことは気づかなかつたとして、この川はどこへ 御座山の麓に、川なんてあつただろうか……？ それに。

唐突に僕は気づいた。何メートルも転げ落ちた訳じゃない。高さは多分、せいぜいあの林道からこの河原までくらいのものだ。それなのにあの山吹の黄色は、もうどこにも見えなかった。

「竣介くん……？ ねえ……？」

伽耶子の不安げな声に、僕は我に返った。

「ああ……」

と、出てきたのは意味のない生返事だ。

「いや、……ごめん。ちよっと、頭が……」

僕はしゃがみ込み額を手で覆った。伽耶子の心配そうな声に何か答えなければと思ったが、とてもそんな余裕がなかった。

「ちよっと考えさせて……ごめん……」

僕がそう言つと、伽耶子もそれきり口をつぐんだ。だが傍らに心配がある。きつと僕が口を開くの、辛抱強く待つてくれているのだろう。僕は懸命に納得のいく答えを探した。だがいくら考えてみても、不安がますます黒々と胸を塗りつぶしていくだけだった。

「ここ、どこなんだ……？」

伽耶子にそう訊ねたかつたが、できなかつた。何か恐ろしい答えが返つてきそう……。

「竣介くん……」

伽耶子がとうとう遠慮がちに口を開いた。

「あの……、山、そろそろ降りたほうがよくないかな……」

「ああ……うん、そうだな……」

僕は顔を上げた。気づけばもう日も傾き始めている。日が翳り始めた山道は僕も歩きたくなかつた。

「どっからか上の道に上がれるのかな」

「あそこ」

と、伽耶子が指を指した。

「あの辺に上にあがる道があるよ」

僕たちは歩き出した。それはちゃんとした「道」ではなく、単にそこを通る人が踏み固めただけのものだったが、それで僕たちは上の林道に出ることができた。

その林道をふたりで並んで下った。黙っているのも気詰まりで、ぼくはさり気なさを装って話しかけた。

「でもよかった……帰ってたんだ。木村、四年のときに一回いなくなっちゃっただろ。これでけっこう、心配してたんだ……。お祖母ちゃんちに毎日電話して、木村が帰ってきたか聞いたりしてさ……」

思いがけない再会に昂揚していたせいか、普段の僕なら決して言わないような言葉が出た。でもそれは本心で事実だった。あのとき僕は、後ろ髪を引かれる思いでこの町を出たのだ。

伽耶子はしばらく黙っていた。それから僕の言葉には答えずに言った。

「私もびっくりした……竣介くんがここにいるとは思わなかったから……」

「今、春休みだろ？ お祖母ちゃんどこにいるんだ。……明日はもう、帰らなきゃなんだけど」

「そっか……。遊びに来たの？ 古神にまた帰ってきた訳じゃないんだ……」

「……うんまあ……、そういうと」……」

なんだか奥歯に物が挟まったような口ぶりになってしまった。伽耶子はそれ以上何も聞いてこず、僕は内心ほっとした。

再び沈黙が僕たちを包んだ。しばらくして、今度は伽耶子が話しかけてきた。

「でも竣介くん、よく私のことわかったね。名前も……もう忘れてるかと思った」

「木村だつてオレのことすぐわかつたじゃん」

伽耶子はちよつと目を反らした。心なしか頬が染まって見える。

その顔がたまらなくかわいらしくて、僕の頬も熱くなった。

「下の名前も覚えてるよ。カヤコ、だろ？」

「……私だつて、竣介くんの苗字も覚えてるよ」

「そりゃオレの苗字なんて、覚えてなくたってこの辺で一番多い苗字言えば当たるって」

あはは、とふたりで笑った。何年かぶりで会つたのに、ずっと一緒だつたような気がした。

僕が伽耶子の名前を覚えていたのは彼女が好きだつたから、ということもあるけれど、その名前の由来が印象的だつたからだ。

同じクラスだつた四年のとき、「自分の名前の由来を調べる」という、よくある宿題が出た。その発表に伽耶子が当てられたのだ。当時の担任は若い女の先生だつた。なぜおとなしい伽耶子を指名したのか。クラスに溶け込ませようとか、もつとはきはきさせようとか、そんなことを考えていたのかも知れないが。僕は少し腹立たしく思つたりしたのだつた。

案の定伽耶子は答えられず、教室で白々とした視線を浴びた。

「自分の名前の由来とかさ、知らなくたって全然困らないよな」

放課後、掃除当番でゴミを捨てにきた伽耶子に、僕は焼却炉の前で話しかけた。

伽耶子はちらつと僕を見、ほんの少しの逡巡の後に小さな声で言った。

「誰にも内緒にしてくれる……？」

「……？ うん」

僕がそう答えると、伽耶子は僕を見ず、

「カヤグムって楽器があるの。私の名前はそれからとつたんだよ」と続けた。

それからゴミ箱の底をぱんぱん！と叩き、中のものをすべて焼却炉に捨てると教室へと戻って行った。

僕はその足で図書室に向かった。分厚い百科事典を引き、それが海を隔てた古い国の琴の名であることを知った。

伽耶子　彼女自身が持つ儂げな花のような雰囲気と相まって、その名前は僕の心に深く刻み込まれた。

僕たちはうち解け、たわいない会話に笑いながら並んで山を下った。

伽耶子が無事でこの町にいた。そして今ふたりで歩いている。僕は先刻の不安も忘れ、幸せな気持ちに包まれていた。

山を下り、町へと入ったとき、僕は呆然となった。

どこかに予感があった。だが……。

山中で伽耶子と会ったときの不安、一旦は小さく固まったそれが一気に膨れ上がり爆発し、胸を真っ黒に染めた。

町の様子が一変している。山の麓に拡がるそれは、僕の知っている古神の町ではなかった。

舗装されていない、先刻の林道のような、人々が往来することので踏み固められた「道」。人影はなく、民家も僕が見知っているものよりも明らかに古い。それはまるで祖母のアルバムの、セピア色に変色した写真の中の風景のように見えた。

僕はとうとう、堪えきれずに吐き出した。

「木村……、おまえ、知ってるんだろ……？」

伽耶子は顔を背けていた。だが僕がかまわず続けた。

「ここ、古神じゃないよな……？ どこなんだ？ ここ……」

「……ここはどこでもないところ……」

消え入りそうな声で、ようやく伽耶子が答えた。

「だから言ったじゃない……私……竣介くん、どうしてここへ来たの？ って……」

一瞬頭に血が上った。伽耶子を睨めつけた僕の目は多分つり上がっていただろう。僕を見た伽耶子は明らかに怯えていた。

僕は怒鳴る代わりに大きく息を吐いた。

「そうじゃなくて」

極力平静に話そうと努めたが、どうにも声が裏返る。人間はこんなにも簡単に、自分を制御できなくなるものなのだ、と他人事のように思った。

「ここがどこか、聞いたんだよ。答えるよ。木村はここにずっとい

るんだろ？」

伽耶子は黙りこくつたままだ。僕は切れて手を上げそうになるのを必死に堪えた。

「あ」

唐突に小さな声を上げると、伽耶子は僕の手を引っ張った。

「！」

思わず手を引っ込めようとしたが、伽耶子は力一杯僕の手を握って、物陰へと引っ張り込んだ。

「なにす」

シツ……と、伽耶子が自分の唇に当てて指を立てた。

伽耶子の目線の先を追う。僕は思わず悲鳴を上げそうになり、慌てて自分の口を自由なもう一方の手で覆った。

向こうからゆらゆらと歩いてくるそのの、朽ちかけた骸以外の何者でもないその姿に、恐怖と吐き気が喉元までせり上がってくる。

伽耶子が手を放した。僕はそれから目を背け、両手で口を押さえると背中を丸めた。

「……もう行っちゃったよ……」

「……………」

僕は伽耶子を見た。さつきまで居丈高に怒っていたのが、女の子、それも好きな子の前で怯えきった姿を見られては立つ瀬もなかった。……それにしても……どうして伽耶子はあれを見て、こんなに冷静でいられるんだろう……。

「何だよあれ……木村はどうして平気なんだ……」

伽耶子は黙っていたが、しばらくして口を開いた。

「竣介くんには、あれはどう見えたの？」

「どうって……」

僕も答えに詰まった。実際に見たものがとうてい信じられない。だが僕は確かに見た。「現実」にはあり得ないものを。

「死体だろ、あれ……。なんなんだ、ここ……なんでこんなところに……………」

「じゃあ私は……竣介くんには、どう見えてるの……？」

伽耶子の言葉に僕は面食らった。質問の意図がわからないかった。「木村は木村だよ。昔っから変わってない。すぐにわかったって言うただろ？」

そう答えてから気づいたことがあり、慌てて付け足した。

「木村にはオレはどう見えてんだ？ まさか、さっきのみたいってことないよな……？」

「……だって、竣介くんは生きてるじゃん……」

言いにくそうに答えた伽耶子の言葉に僕は確信した。

やはりこは、死者の国なのだ……。

そして同時に、どうやら自分がまだ「生きてる」「らしいこと」に安堵もしたのだった。

きつと伽耶子も、なんらかの理由でここに迷い込んでしまったのだろう。こんなところに長い間ひとりでいたなんて、どんなに怖く寂しかったことだろう。ふたりで帰ろう、と、僕は先刻の怒りも忘れ、強く思った。

「さっきのアレだけ……」

と、物陰に座ったまま伽耶子に話しかけた。

「まさか、襲ってきたりとか……」

「そんなことはしないよ」

伽耶子が答えた。

「ああやって歩いてるだけ……死んだばかりだと、話しかけてきたりすることもあるの」

「……ぞつとしないな。話しかけるって、『ボク死んじゃいましたよ、あなたもですね？』とか？」

「……」

伽耶子は僕の寒い冗談には答えてくれなかった。

やたらに恥ずかしくなり、僕も黙った。

町はオレンジ色に染まっている。空はまだ青かったが、もうじき

に茜色に変わるだろう。そして 気づいて不安になり、僕は再び口を開いた。

「なあ……ここ、夜とかどうしてんの？ 木村の家とかあるの？」

「私の家じゃないけど……」

今度は答えてくれた。伽耶子は立ち上がり表に回ると僕を手招きし、玄関の引き戸を開けた。

中は土間になっていた。祖母の家もたいがい古いと思っていたが、農家以外で土間がある家なんて初めて見た。

「おい」

「空き屋なんだよ、ここの家はみんな、基本的に。空いてる家は自由に使っていいの」

そう言うと、伽耶子はそこが自分の家であるかのような自然さで上がり込み、奥から声をかけてきた。

「食べ物もあるよ。お腹空いてる？」

「……あ、いや」

僕は慌てて否定した。実際身に起こったことで頭がいっぱいで空腹は感じてなかったし、それに……。

どこかで心に引つかかっていた。多分幼い頃に読んだ絵本だ。

祖母がくれた本だった。日本の神話をわかりやすく子供向けに書いたもので、その中に黄泉の国へ妻を探しに行く男の話があった。

男は確か、「黄泉の国の食べ物を食べたから私は戻れない」と妻に言われるのではなかったか……。

そこまで思い出し、僕は考え込んだ。もうひとつ、何かあった気がする。あの話の中には、思い出しておかねばならない何か、大事なことが。

「でもちよつとびっくりした」

伽耶子の声に、僕は我に返った。

「竣介くん……もつと驚くかと思ってたから……あんまり怖がらなかつたよね、あの人たちのこと」

やっぱり男だからかなあ、というのを、僕は気恥ずかしく聞いて

いた。本当にあまり怖がってないように見えたのだろうか。僕は腰を抜かしそうだったのに。

「……うち、お祖母ちゃんがちょっと変わってるからかな」

そう言うと、伽耶子がぽつんと応えた。

「拝み屋さんだっけ……」

「もう廃業したけどね」

僕はそっけなく言った。言うてから、思い当たった。

祖母が加持祈祷をやらなくなったのは伽耶子がいなくなった頃だ。既に引越して古神の町を離れていたけれど、しょっちゅう祖母に電話をしては伽耶子が見つかったかどうかを訊ねていたあの頃、祖母が一度、「どこにもおらんものは見つけようがない」と言ったことがあった。僕はそのとき、祖母にひどく失望したのだった。

母は元々、祖母のしていることには批判的だった。いつも「胡散臭い」「拜んでどうにかなるなら人間は苦労しない」などと言っていた。

僕は母と違い祖母のことは好きだったし、その生業なりわいをどうこう感じたこともなかったけど、このとき祖母の言葉を聞いて、母が正しかったのだと思った。徐々に電話をしなくなったのは、そうした失望も原因のひとつだったのだけど、今この異世界で伽耶子に再会してみると、祖母の言葉の意味がわかった気がしたのだ。

ここは多分、あの世でもこの世でもないところなんだろう。そんなバカげたことを当たり前に考えてしまう僕は、やはり祖母の孫なんだろうとも思った。

窓の外はまだ明るかったが、部屋の中はすっかり暗くなってきた。伽耶子がどこからランプを持ってきて、それに灯を点した。

明るくもなく、テレビもラジオもない夜は、もう寝るしかなかった。だが僕はなかなか寝付けなかった。当たり前だ。これから自分がどうなるのか、それを考えると叫び出しそうになる。

また伽耶子がすぐ横にいるのも理由のひとつだった。どんな状況

であれ、否、こんな状況だからこそ、かも知れない。好ましく思っている女の子と夜を共に過ごしているというのに、のんびり寝ていられる訳がなかった。

ランプの光はひどく心許なかったが、それでも暗闇ではないといっただけで僕に安心をくれた。窓も戸口もすべて鍵をかけた。壊されればひとたまりもないのだろうけど、外界と隔てられ、守られていると感じる。普段家にいても、到底持ち得ない感覚だ。それはキャンプのときの、テントの中で夜を過ごす気持ちとよく似ていた。

僕たちは同じ部屋にそれぞれ布団を敷き、背を向け合って横になっていた。死者の国の、誰が使ったかわからない布団で寝るなんて気持ち悪い、とは思ったが、僕のやわかな背中では畳の上ではとうてい我慢できなかったし、体ひとつで寝っ転がるのも無防備な感じで心細かったのだ。予想と違い、布団はよく膨らんでいて清潔な感じがした。

僕は寝返りを打った。薄明るいランプの灯に、伽耶子の黒髪が目に入った。

「木村……」

僕は小さな声で話しかけた。

「一緒に、帰ろうな……」

返事はなかった。僕もそんなもの、最初から期待していない。再び寝返りを打つと、伽耶子のこれも小さな声が聞こえた。

「私……」

僕は待った。その言葉の続きを。だがそれつきりだった。僕はいつしか眠りに落ちた。

翌日、僕たちは川のほとりにいた。

大きな川だ。向こう岸は見えるけれど、そこに見知った人が立っていない。きつとそれと気づかないほどの川幅があった。

向こうの河原には草が茂っている。湿地になっているのかも知れ

ない。春に霞んで朧に見えた。こちら側はよくある石ころだらけの河原だった。ところどころに草が生えたその河原を見下ろす土手を歩きながら、ぼつりと伽耶子が言った。

「ずっと帰りたかったけど……」

僕は伽耶子の横顔を見た。伽耶子の表情は、長い髪に隠されていてわからなかった。

「私は今は……、この川の向こうへ行きたい……」

「向こう岸に行きたいなら、橋とか渡しとかあるだろう……？」

僕が曖昧にそう言っていると、伽耶子がこちらを見た。

「ないの。ずうつと探してるけど、橋も渡しも見なかった」

「……」

「船は見たことあるんだけど……」

「じゃあやっぱりあるよ、少なくとも渡し場は、どこかに」

「……うん。そう思ってる、ずっと探してるんだけど……」

伽耶子は少し俯いた。再び上げたその顔には、すがるような色があつた。

「竣介くん、一緒に来てくれる……？」

僕は答えに詰まった。川に隔てられた彼方と此方。簡単に頷いてはいけない気がした。

だけど僕にもこの世界でアテがある訳じゃない。それどころか心細くてたまらない。伽耶子と離れてこの世界を、ひとりでさまようことなんて考えられないのだ。

「とりあえず、渡し場を探そう」

僕はそう答えた。

伽耶子はそれ以上何も言わず、僕も口を開かなかつた。ただふたり、歩き続けた。どれだけ歩いた頃か、ふと対岸を見た僕の目に、黄色い塊が映つた。

「！」

山吹だ……！

その涼やかな黄色を目にしたとき、心にわだかまっていたものが

晴れた気がした。ここが死者の国ならば、川の向こうが僕らの国、すなわち「この世」のはずだ。伽耶子が川の向こうに帰りたくなつたのも、それで納得がいく。

「川の向こうに、一緒に行こう」

僕がそう言つと、伽耶子の顔が、それこそ花のように明るくほころんだ。

「本当……?」

「うん」

僕は伽耶子の手を握つた。どうしてか、とても親密な気持ちになつていた。

「一緒に帰ろう……」

伽耶子は答えなかった。ただ、手を握り返してきた。

僕たちは歩きながら、あるいは土手に腰を下ろし、色んなことを話した。僕はお喋りな方ではなかったし、伽耶子も元々おとなしい子だったからあまり会話が弾む、という感じではなかったけど、それでも小学校の同じクラスにいた頃よりは何倍も話したと思う。頼れるのはお互いだけ、という状況は否応なくふたりを結びつけ、僕はいっつか、伽耶子を苗字ではなく名前で呼ぶようになっていた。

日が暮ればそこらの家に潜り込んで眠り、目覚めては手を繋ぎ、渡し場を探して川の辺を歩く。それは悪くない旅だった。もちろん早く帰りたかつたけれど、ほんの少しだけ、伽耶子とこうして歩き続けていたい気持ちもあった。

あるとき僕たちは川を見下ろす土手に座り、ぼんやりと休息を取つていた。この世界は常に凪いでいるように穏やかだった。空は明るく風はやわらかく、まどろんでいるような静けさがあった。

「竣介くんのお母さんやお父さん、心配してるかな……」

伽耶子がそう言うのに、僕は前を向いたまま答えた。

「さあ、どうかな」

竣介なんて、いらぬ。

と言われたことはないが、似たようなことは言われたことがある。両親が喧嘩していたときだ。母が「竣介さえいなければ、あなたと一緒になんかならなかったのに」と言ったのだ。

両親はふたりとも僕には優しくかった。このときふたりは、家に僕もいることに気づいてなかったのだ。だからきつと、母は本気だったと思う。少なくとも半分は。

残りの半分は……喧嘩でつい出た言葉だったのかも知れない。でも僕は普通に母のことも父のことも嫌いじゃなかったから、この言葉はシヨックだった。それまでの可愛がられた記憶があったから、愛されていない　とまでは思わなかったけど、僕はそれ以来、両親に自然に接することができなくなってしまった。

少しは心配すればいい……。

僕は意地悪な気持ちで子供っぽくそう思った。

「伽耶子のお母さんは心配してたよ」

と、僕は言葉を継いだ。

「お祖母ちゃんここにも来てた」

伽耶子のひどく悲しげな表情を見て、僕は後悔した。

つまらないことを言うんじゃない……伽耶子はもうずっと、ひとりでここにいたのに……。

「……いなくなつてから心配したつて遅いよね」

ぼつん、と伽耶子がつぶやいた。伽耶子の言葉に、僕は彼女もまた、「いらぬ子」と言われたことがあるのだからかと思つた。

「一緒にいるとき、どんだけ大事かわかんないんだよ。自分がすつきりしたくてひどいことも言つちゃうんだ。でもきつと、本気じゃないよ」

僕はつい先刻、自分自身もいじけていたくせにわかつた風なことを言った。きれいな事を言うな、と言われるかとも思つたが、伽耶子に何か言葉をかけてやりたかつたのだ。

伽耶子はうつむき、

「そうかな……」と小さく応えた。

「お母さんやお父さんに、また会えるのかな……」
「会えるよ、きっと」

僕は答えた。そう信じなければ、きっとこの世界で狂ってしまう……。

ふと河原に目をやると、ゆらゆらと亡者が歩いているのが見えた。

「あの連中、なんであんな姿でここらをつろつろしてるんだろっな」
僕は訊ねるともなく伽耶子にそう言ってみた。伽耶子は少し考え込んでいる風だったが、やがて答えた。

「きつとあの人たちにも、もうわからないんだよ……どうして、自分たちがああしているのか……」

言葉の最後は小さく消えた。まだ何か、続きがあるのかと僕は待った。

「私も、ずっと待ってたけど……」

伽耶子が言葉を継いだ。

「あんまり長い間待っていると、何を待ってるのか、誰を待ってるのかもわかんなくなっちゃうんだよね」

「……」
「ただ待ってるだけ……理由も覚えてないのに……」

「もう、忘れちゃったんだ……?」

僕が笑ってそう訊ねると、伽耶子も笑顔を見せて、
「でも思い出したの。竣介さんと会って」と言った。

「私、お祖母ちゃんが迎えに来てくれるんじゃないかなと思ってたの。お祖母ちゃんも、ずっと帰りがってたから」

「帰りがってた、って、どこへ……?」

竣介くんを待ってた……なんてやっぱり言う訳ないか、と少しがっかりしながら、僕はそんな内心はおくびにも出さずに再び訊ねた。
「海の向こう……。お祖母ちゃん、海の向こうから来たの」

伽耶子の口調はあっさりとしたものだった。伽耶子の名前の由来を知っていたから、僕にも特に驚きはなかった。

子供の頃にはわからなくても、今ならわかることもある。伽耶子のお祖母さんにとつて、日本という国は決して生きやすい場所ではなかっただろう。伽耶子にもそのお祖母さんの血が流れている。それは伽耶子が、いつもひとりであったことと無関係ではないはずだ。

「お祖母ちゃんもきつとずっと待ってたと思う……誰か、海の向こうへ連れて帰ってくれる人を……」

ぼんやりと考えに耽っていた僕を、伽耶子の声呼び戻した。

「伽耶子が待つてたのも、『川の向こうへ連れて行ってくれる人』だっただんだ……」

努めて明るく言ってみただけ、

「だって……ひとりで行くのは怖いもの……」

と答えた伽耶子は、うつむいたままで土手に生えている雑草を心許なくむしっているだけだった。僕はそれを聞き、またその様子を見て、伽耶子がいなくなつたとき、まだ十歳の子供だったことを改めて思った。

伽耶子が顔を上げた。とても綺麗な、散る花のような笑顔だった。「そしたら竣介くんが来てくれた。一緒に行こうって言ってくれた……だからわかつたの。私が待つてたのは、本当は竣介くんだったんだった」

「え……」

頬が熱くなり、顔が赤らむのが自分でわかつた。伽耶子と目を合わせていられず、僕は顔を伏せた。

「私……嬉しかった。本当に……」

伽耶子の声は本当に嬉しそうだったけれど、最後はなぜだかすれていた。こっそりと盗み見ると、伽耶子も再び顔を伏せていた。

「伽耶子」

噤り上げるように、伽耶子が小さく嗚咽を漏らした。

「泣くなよ……もう、ひとりじゃないんだからさ」

そう言うのが精一杯だった。伽耶子は、

「うん……ごめんね……」と応えたが、顔を伏せたままだった。小さな肩が震えている。僕はかける言葉を失い、所在なく辺りを見渡した。

土手には色んな花が咲いていた。雑草の類の、名前も知らないだろうということもない花だ。

僕は立ち上がりそれらを摘むと花束のようにして、俯いた伽耶子の視線の落ちた先に差し出した。

「これ上げるから……元気だしなよ……」

伽耶子が顔を上げた。そして僕を見、笑った。それは不思議な笑顔だった。ちよつと呆れたような、でも含みのない、晴れやかな。

目の縁はまだ赤みが残っていたけれど、伽耶子は明るい声で、

「ありがとう」と応え、その花で器用に小さな腕輪を作り、

「お返し」と言つて僕にくれた。

伽耶子のそんな茶目つ気を見たことがなかったから、僕もなんとはなしに嬉しくなり、また立って花を摘んだ。伽耶子も立ち上がった。僕たちはふたりで歩きながら花を摘み、立ち止まっては花を編みながら、川縁の土手を下った。

川には船があった。何度かすでに見かけたことのある、客を乗せ、ゆつくりと向こう岸へと渡る船。それは小さく霞み、白く光っていた。

その日、僕たちは珍しく川を逸れ、林の中を歩いていった。川沿いに道がなく、しかたがなかったのだ。伽耶子はひどく不安そうだったが、黙って僕の少し後ろを歩いていった。

やがて林を抜けた僕たちが見たのは、草深い湿原にぼっかりと浮かんだような湖、そこに映る青空と円錐形の山、そして湖の向こうにあるその山そのものだった。

「うわあ……」

思わず声が出た。水の面はまさに鏡のように澄み、ただ平らかで、逆さに映った空と山は夢のように見えた。この世のものではない。今、僕たちがいるこの世界は元々「この世」ではないのだからこの表現もおかしいのだけど、湖の面に映っていたのは儂く美しく触れることの叶わない、まさに常世の国だった。

またその向こうにある山がひどく懐かしい姿をしていたことが、僕の胸を揺さぶった。

古神の周辺に生まれ育った者なら誰でも知っている、一帯のどこからでも同じ姿を見ることができきれいな円錐形……。

「御座山だ……！」

湖には向こう岸へと誘うように、板を互い違いに渡しただけの簡単な橋。八橋が組まれていた。僕は思わず繫いでいた手を放し、八橋へと走った。

「竣介くん……！」

伽耶子が叫んだ。ひどく切羽詰まったような声。伽耶子が大きな声を出すのも初めて聞いた。僕は八橋を少し渡ったところで振り向いた。

「どこ行くの……？ 川から遠ざかっちゃうよ……！」

「伽耶子も来いよ！ 早く……！」

僕も叫んだ。伽耶子は、だが凍りついたようにその場を動かさずと

しなかった。僕は焦れっなくなり、伽耶子の許へと駆け戻った。

「どうしたのさ……？ わかるだろ、御座山だよ。あそこまで行けば帰れるんだ」

そう言ってみたが、伽耶子は後ずさるようにながら答えた。

「だって……あそこまでは遠すぎるよ。近くに見えたって、山はすごく遠いんだよ……辿り着けるかどうかもわかんないのに……川に戻れなくなっちゃう……」

ぐずぐずと駄々をこねるような伽耶子の様子に、僕の頭に血が上った。

「川になんて、もう戻らなくなつていいだろ？ 山に行けば帰れるんだから！」

思わず語気が荒くなった。僕は伽耶子の手を掴むと、湖へと彼女を引っ張った。

「やだ……！」

八橋を少し渡ったところで、伽耶子が僕の手を振りほどこうとした。そんな強い拒絶を見せたのも初めてのことだった。

「危ない……！」

細い板きれ一枚、欄干も何もない「橋」の上で、僕たちは凶らずも揉みあう形になった。視界が揺れ、水面に映ったふたりが目に入ったとき、僕は思わず伽耶子の手を放してしまった。

伽耶子はそのまま僕から逃れ、元いた水縁へと走り戻った。

「……………」

嫌な汗がどつと噴き出し、額を濡らしているというのに、僕の指先はひどく冷たかった。心臓が痛い。息ができない。

「か……、伽耶子……」

ようやく喘ぐような声が出た。

「怖くないから……オレがいるから……だから、一緒に行こう……」

伽耶子は小さな子供がするようにイヤイヤと頭を振ると、本当に子供のようにその場に座り込んでしまった。僕はしばらく橋の上に立ち尽くしていたけれど、伽耶子と別れひとりで湖を越える気には

どうしてもなれなかった。

「……………」

どれだけそうしていただろう。溜息をつき、ひどい疲労感を覚えながら、僕は伽耶子の許へと再び戻った。

「もついいよ。わかったから……。行こう。川に戻る道を探そう」

僕は座り込んだまま泣いている伽耶子の手を取り、彼女を立たせた。そしてその手を引き、林へと戻った。常世の国を映した湖とその向こうの山が、無言で僕たちを見送った。

「それ」に気づいたのはいつだっただろうか。

湖を背にした翌日か、それより数日経った後か　僕は伽耶子の白い頬に小さな染みを見つけ、自分の頬をつついて言った。

「ここ。汚れてるよ」

伽耶子は恥ずかしそうに自分の手で頬を拭った。だが染みは取れなかった。僕は手を伸ばし、伽耶子の頬に触れてそれを擦り落とそうとしたが、やっぱり染みはそこにあった。

その小さな染み　否、僕が染みだと思ったものが、そのときから伽耶子を蝕み始めた。

腐り始めたのだ。少しずつ、伽耶子が。あの亡者たちのように。

ぽつんと伽耶子の頬にできた小さな染みが黒く拡がり始めたとき、僕は伽耶子に、

「やっぱり戻ろう」と言った。

どこにあるかわからない渡し場を探すより、湖を越え山を目指すほうが絶対に早い、と思ったのだ。早く「この世」に戻らないと、伽耶子が腐ってしまう　それは確信だった。

伽耶子はひどく嫌がり泣いていたが、僕は頓着しなかった。伽耶子のためなのにどうしてこいつは、という凶暴な気持ちで噴き上がってくるのを必死で抑えながら、引きずるようにして来た道に戻った。

ただどれだけ探しても、湖へ至る道は二度と現れなかった。僕たちは疲れ切り、やがて重い足どりで再び川辺への道を辿った。

川辺では今しも太陽が向こう岸へと沈もうとしていた。とろりと熟したオレンジ色の円形が、茜色の空に浮かんでいる。燃え立つような朝陽とは対照的に、それは光を内側に閉じこめ、まさに今眠りにつこうとしているように見えた。

常世の国は日が沈むところにある　死にゆく太陽を見ながら、僕はやはり川の向こうが「あの世」なのだと悟った。そして伽耶子が、山の麓ではなく川の向こうへ、あれほど行きたがった本当の理由もようやくわかったのだった。

伽耶子とは、行けない……僕ははつきりとそう思った。伽耶子と僕では、すでに住むべき国が違っているのだ。

でも僕は伽耶子と約束した。だからせめて、渡し場まで是一緒に行こう。

僕はそう決心し、自分に強く言い聞かせた。でも伽耶子が差しのべた手を、僕はもう取ることはできなかった。

伽耶子は僕の仕打ちにひどく悲しそうだった。伽耶子の心は傷ついたと思う。けど何も言わなかった。黙って手を引つ込めた。そんな伽耶子の様子に僕の心も痛んだ。腐り始めた伽耶子を僕はもうまともには見られなかったけれど、気持ちはまだ残っていた。

残ってはいたけれど。

込み上げてくる嫌悪や不快、そして恐怖はどうしようもなかった。僕は自分で思うほど、伽耶子のことを好きではなかったのかも知れない。同じクラスだったあの頃からずっと一緒に過ごしていれば、伽耶子がどんな姿になっても大切に思えたのかも知れない。だけど僕たちにはそんな共有した時間などなかったし、どれだけ頭で考えたとところで、現実にムリなものはムリだった。

どうしてこんなことになってしまったんだろう……。

思いつく原因と言えればひとつしかなかった。湖だ。僕は湖で、水面に映る伽耶子の姿を見てしまった。

ほんの一瞬だったのに　すぐに目をそらしたのに
そこにあつたのは、目の前でもみ合っている伽耶子とは似ても似
つかない姿だった。

見たくなんか、なかったのに

でも僕は見てしまったのだ。伽耶子の本当の姿を。僕の胸にある
神話の、忘れていた部分がくつきりと蘇った。

伽耶子は本当は、最初から湖に映ったあの伽耶子だったのだ。た
だ僕が気づかずにはいたただけだ。丁度あの、黄泉の国で妻と再会した
ときの男のように。

態度を豹変させた僕を、伽耶子はどう受け止めているのだろう。
ぼくにはそのことも恐ろしかった。でも僕には、それを確かめるこ
とはできなかった。

伽耶子が無口なのをいいことに、僕もまた口を閉ざし、顔を背け
て旅を続けた。逃げ出すことは考えなかった。否、考えないように
していた。伽耶子を川の向こうへ送り出す……そのことだけを、僕
は必死に考えていた。伽耶子を気遣う余裕など到底なかった。どう
せ腐った死人じゃないか、脳味噌だって腐ってるんだ、感情なんて
ある訳ない　そんな風に考えては、つい先日までの伽耶子の様子
や自分の気持ちがい出され、また泣けてくるのだった。

伽耶子はそんな僕の思いをよそにどんどん腐っていった。白い肌
が赤黒く変色し、やがて融ける。気づいたときには一言も口を利か
なくなっていた。

足取りもゆっくりと頼りなくなっていた。伽耶子がちゃんと後ろ
をついて来ているか、見たくないのに僕は何度も振り返って確かめ
なければならなかった。

伽耶子の落ち窪んだ眼窩からずりりと落ちるものを見てしまった
とき、僕は思わず両手で口を覆った。だが大きく叫ぶように開いた
口からは、声は出てこなかった。穴の開いた袋のように、息だけが

漏れた。よくホラー映画で人が絶叫しているけどあれはウソだ。恐ろしすぎると声も出ない。

もう耐えられなかった。僕は駆けだした。

遠くへ、ほんの少しでも遠くへ。伽耶子から。僕はただ、伽耶子から離れたかった。

ただ闇雲に走った。伽耶子は追いかけてきたりはしないのに。なぜか涙がボロボロ溢れて、前がよく見えなかった。最後には足がもつれ、つんのめった。

河原には柔らかな草が茂っていて、僕を受け止めてくれた。青臭い空気を痛む肺にせわしなく吸い込んで吐き出しながら、僕はいつまでも倒れたままでいた。

僕はすでに昔読んだ絵本の内容を思い出していた。初めのうちは忘れていた、でもどこかにひっかかっていたあの部分だ。

あの神話　黄泉の国へ妻を迎えに行った男は、妻の腐った姿を見て逃げ出すのだ。

僕はあの話を読んだとき、子供心に男はひどい、と思った。恋いこがれ、黄泉の国にまで迎えに行くほど愛していたんじゃないか。たとえ姿は恐ろしく変わってしまったとしても、男の気持ちが本当なら、逃げ出したりする筈がない。見た目が変わっただけで気持ちも変わるなんて、男の愛は本物じゃなかったんだと。

「……………」

僕はしゃくり上げた。鼻の奥がつんと痛くなり、再び涙が込み上げてきた。

あの男は僕だ。幼い僕が軽蔑し、怒りを覚えたあの男は、そのまま今の僕自身だった。

どうしてこんなことになってしまったんだろう。僕はどうして、ここへ来たのか。どうしてこんな……悲しくやりきれない、惨めな思いをするためか……。

滲んで夢のように眼前に広がった、黄色い花を思い出していた。僕を手招くように揺れた山吹の花。あるとき伽耶子を思い浮かべ

たのはなぜなんだろう。もう僕は、彼女のことは忘れて思い出しもしていなかったのに。

伽耶子が僕を呼んだのか……。

そう思ったとき、怒りと痛みが僕の胸を刺した。

なぜ、僕なんだ……。

そう思った。僕と伽耶子の繋がりには、四年生のときに同じクラスだったということくらいしかない。呼ぶなら伽耶子の父親か母親か、そうでなくてももっと親しく交わった友人を呼べばいいじゃないか……。

だけどそんな気持ちもごまかした。内心では気づいていた。

僕は嬉しかったのだ。

伽耶子に再び会え、伽耶子と一緒に旅をすることが。伽耶子は僕の初恋だった。

伽耶子に竣介くんを待ってた、と言われ、晴れがましく誇らしかったあのときの気持ち。一緒に帰ろうと誓った。僕は本気だった。どこまでも伽耶子を守って一緒にいけると思った。それが。

伽耶子が、僕の思っていた伽耶子じゃなかったというだけで。

自分の身勝手さに反吐が出そうだった。だけどどうしようもない。僕にはわかったのだ。

人は弱い。すぐに惑い、あっけなく心も変わる。頼りなく、信じるに足らぬ存在。僕もまた、愚かで卑小な人間だった。

亡者の列が僕の脇を通り過ぎた。草むらに伏した僕など目に入っていないようだ。

僕も何の感慨もなく彼らを見送った。僕はもう彼らには慣れていて、特別な感情を持たなくなっていた。

いっそ伽耶子に対しても、同じ気持ちになればいいのに……。そう思った。

預かり物の荷物のように、何の思いもなくただ伽耶子を引きずって渡し場まで連れて行き、船頭に託せたらどんなにラクだろう。

僕は起きあがり、見るともなく彼らの去った方向に目を向けた。

彼らは陽炎のように揺らめきながら、草影の向こうに消えようとしていた。

ただあてどなく歩き続ける屍体。彼らはどこへ行くこうとしているのか……どこか、目指す場所があるのだろうか……。

僕はぼんやりと、それぞれの亡者の列がこの国のどこかで出会い、やがてひとつの大きな流れとなって、何処かへとゆっくり去っていく様を思い浮かべていた。

彼らはいつも数体で歩いていたらけれど、彼ら自身の考えでそうしているとは到底思えなかった。はつきりとはしないけれど、僕はそこに何か大きな、それぞれのものではない「意志」のようなものを感じていたのだ。

「……っ！」

唐突にひとつの考えが僕の脳天を打った。

伽耶子！ 伽耶子が亡者の列について行ってしまっ……！

僕は慌てて立ち上がり、再び元来た方向へと駆けだした。なぜそんなことをするのか、自分でもわからなかった。

伽耶子があゝの列に加わって何処かへ消えるなら、そのほうが僕には都合がいいはずだ。伽耶子にだって、そのほうがきつといい……僕に疎まれ、恐れられながら一緒に旅をするよりは。 。
それでも僕は、伽耶子の姿を求めて走った。

僕が伽耶子を置き去りにした辺りを少し探すと、伽耶子は簡単に見つかった。少し離れたところに所在なげに立っていた。

「……伽耶子」

荒い息をつぎながら声をかけると、伽耶子はぼんやりと僕のほうに顔を向けた。

「ごめんな、伽耶子……いきなり走り出したりして……」

なぜか切なく、悲しくなった。僕は手を差し出した。

「……行くっ……」

僕たちはどのくらい歩き続けたらう。目に映る風景も随分変わった。僕が最初、この世界へ迷い込んだときは、風景は古びていてもつきりとしていた。僕たちは道の端の民家にも潜り込んだし、布団で寝もした。それらにはみんな確かな感触があった。

空には太陽があり、夜が訪れて月も見えた。僕は星座には詳しくないけど星もあった。

だけど今は。

見上げてても太陽は見えない。空は変わらず青かったが、磨りガラスを透して見ているように、あるいは青の上に白い絵の具を溶いて流したように霞んでいた。

地上に目を戻せば、そこも同じようなものだった。描かれた風景の上から薄い黄土色を重ねて塗り込めたような、画集で見た、夕暮れの風景のような……そこにあるはずなのに、静かで遙かに遠い世界だ。

ただ川だけが、くつきりと確かに僕たちの前に横たわっていた。水面は静かで、ところどころが白く光っていた。

夜ももう、この世界にはやってこない。僕たちが歩き疲れる頃、世界は翳る。柔らかな草の上で眠り、目覚めればまた明るくなった川野辺を歩き出す。僕自身もまた、緩やかにこの世界の一部になるうとしていたのだと思った。

この国は黄昏の国 何もかもが穏やかにまどろんでいるのだ。ここで怒ったり泣いたりしているのは、きっと僕だけだ。

僕は道の端に白い花を見つけた。瑞々しい葉の緑や花の形、それが風に揺れる涼しげな様子が山吹にとてもよく似ていた。

僕はその花を短くいく枝も折取った。

「伽耶子」

僕は伽耶子に話しかけた。やっぱり正視はできなかつたけれど、

この頃僕は、また伽耶子に話しかけるようになっていた。どうせふたりで旅を続けるなら、伽耶子を物のように扱うのではなく、人のように接するほうがラクだと気づいたのだ。

この世界の空気が僕にそう思わせたのかも知れない。僕自身が伽耶子と同じ存在になりつつあるからなのかも知れない。とにかく僕はそう思ったのだった。

伽耶子はもう、ひどい有り様だった。美しく清楚だった頃の面影はもうどこを探してもない。僕が恐れ、嘆き悲しんで逃げ出したときより、もっとおぞましい姿になり果てていた。

「伽耶子の名前の由来は聞いたけど、オレの名前のことは話してなかったよな」

白いワンピースもカーディガンも、伽耶子の融けた肉でどろどろに汚れていた。僕は手にした白い花を、伽耶子の乱れて固まった髪に挿した。

「オレの名前はさ、画家の名前なんだ。母さんは色々尤もらしく言うってたけど、そんなんじゃない、単純に親父が好きだった画家の名前をつけたの。オレの親父、元々絵描きになりたかったんだよ」

話しかけながら、何本も何本も……それからカーディガンのボタン穴や、ワンピースの襟元にも挿した。

「伽耶子のところもあんまりうまくいってなかったっぽいけど……うちもあんまりよくなかったよ。親父、全然甲斐性なかったからね。

お祖母ちゃんともうまくいってなくて、それもあって引越したんだ。

最初に会ったとき、どうしてここに来たの？って聞いただろ？

本当は親が離婚の話し合いすんにジヤマだから、こっちに預けられてたんだよ。まあオレは……不機嫌でケンカばかりしてる親と一緒にいるよりは、こっちにいたほうがなんぼかよかつたけどさ……」

どうにも惨めで恥ずかしくて腹立たしくて、自分のことは伽耶子には話せなかった。でももっと早く、会ったときはムリでも、旅の途中で話しておけばよかった。そうすれば伽耶子の話だって、聞い

てあげられたかもしれないのに。
いつか伽耶子が目の前で見せたやり方を懸命に思い出しながら、僕は花を編んで花輪も作った。僕はそれを、伽耶子の頭に載せてやった。

「……………」
全身を白い花で飾り立てた、腐り果てた死体　泣けばいいのか
笑えばいいのか、僕にはわからなかった。

一迅の風に白い花びらがはらはらと舞い散った。僕は少し笑った。今僕が伽耶子に捧げた花は、早晚萎れ、むなしく散ってしまうのだらう。

「大丈夫。また花が咲いていたら、摘んでやるよ」
また幾ばくかの時間が過ぎた頃。

僕たちは船を見た。

彼方に白く光る船じゃない。それは流れに棹さし、ゆっくりと向こう岸へと漕ぎ出していくところだった。船頭も、客の姿もくつきりと見える。川に飛び込めば泳ぎ着けるほどに近かった。

渡し場が近い……………！

僕はそう思った。眠っていたような体中の感覚がまさに目覚めたように、隅々までまざまざと漲ってきた。

「伽耶子、早く……………！」

僕は我慢できずに少し先まで駆けては振り返り、伽耶子をせき立てた。伽耶子の覚束ない足取りがひどく焦れつたかった。

背が高くなってきた草をかき分けながら進むと、唐突に僅かな空き地に出た。水辺に板を渡しただけの、あっけないほどに簡素な渡し場がそこにあった。空き地にこれもごく質素な床几しょうが置いてあり、白く薄い髪と髭を肩の辺りまで垂らした小さな老爺が座っていた。

「……………」
老爺は穏やかな表情を僕に向けた。僕は気づいた。これは人じゃない。

目鼻立ちも居ずまいも、人と全く変わらない。それでも何かが違うのだ。だがそれは、間違いなく僕がこの国で初めて出会った、「生きている者」だった。

「……こんにちは……」

僕はおずおずと声をかけた。

老爺は僕に笑いかけた。僕は少し安心し、言葉を継いだ。

「船に乗せて欲しいんですけど……」

「船に乗って、どうするね」

「向こう岸に渡りたいんです」

老爺の問いにそう答えると、老爺は「ふむ……」というように髭をすごいた。

「おまえが、かね？」

「いえ……」

僕は言いよどんだ。後ろを振り返る。伽耶子はそこにいた。

「この子です。この子を向こう岸まで、乗せてやって貰えませんか」
老爺は目を細め、僕から伽耶子へと、ゆっくりと視線を移した。

「おまえたちはこの川を渡るために、長い旅をしてきたのだね」

訊ねるともなく、そう言った。

やわらかな風が優しく頬を撫でる。老爺の背では川面がきらきらと光っていた。

「だがそれを、船に乗せることはできません」

「なぜですか」

問うてはみたものの、僕は老爺の答えには驚かなかった。なぜかそんな気がしていたのだ。

僕たちが見た船は白く美しく、乗っていた者もみな輝いて見えた。どれほどの白い花でその身を飾ったところで、黒く腐った伽耶子はあの船の客にはふさわしくない。

でも僕は食いが下がった。

「この子がこんなになってしまったのも、ここに長くいすぎたせいだ。この子は本当にもう長い間、川の向こうへ行く道を探していた

んです。よつやくここまで辿りついたのに……それはあんまりだ……」

ふむ……、と、老爺はまた髭をしごいた。

「おまえは腐った亡者の列を見たことがあるだろう」

「……はい」

僕は答えた。老爺が何を言うつもりか、僕にはわからなかった。

「あれはこの世に未練を残した者どもだよ。未練やそういつたものはみな此岸に捨てて行かなければ、船に乗ることはできんだ」

「でも、この子は船に乗りたがってます。それがこの子の望みなんです。他にはもう何も無い。なのにどうして乗せて貰えないんですか？」

老爺は再び目を細め、僕を見た。内心を見透かすような視線だったが、それは不快なものではなかった。

「おまえは自分にウソをついているね。おまえはその望みを知っているだろう。その望みは、おまえと船に乗ることだ。だがおまえはそれを望んでいない。だからそれも船に乗ることはできんだよ」

「……ではこの子は」

と、僕も続けた。自分のことも言われたのだ。僕は必死だった。

「永遠に船には乗れないのですか。そして僕も、この子と一緒にこの国を旅し続けるしかないのですか」

「神ならぬ身なら終わりは必ず訪れる。必ず救われる。それがいつかは、わからんが」

老爺は視線を緩めた。

「さあ、もう話は終わりだ。もう行きなさい」

そう言つと老爺は僕たちにすっかり関心をなくしたようだった。

老爺は再び川面に視線をやり、地蔵のように動かなくなった。

「お爺さん……！　どうかお願いします……！」

もう一度言ってみたけど、もう何の反応もなかった。

僕と伽耶子は長い間そこに立ち尽くしていた。だが船は戻って来

ず、僕たちもとうとうあきらめてその場を去った。渡し場は草に隠れ、すぐに見えなくなった。

老爺は言った。行きなさい、と。でも、どこへ？

これまでは渡し場を探すという目的があつた。でもその目的は今ではもう消えた。

これからの長い旅を、何を待みに、どこを目指せというのか……。老爺の言った「終わり」に向かつて？ 終わりって何だ？ 僕もまた、死んでしまうということが……。？

そこまで考えて、僕はなぜだかおかしくなった。それから涙が出た。

ここは死者の国。それならここにいる僕も、僕自身の気持ちはどうであれ、死人に決まってるじゃないか……。

僕たちは目的を見失い、それでも川辺を歩き続けていた。もし僕他に生きている者がいて今の僕たちを見たとしたら、僕たちはきっと、あの亡者たちのようにただ風に吹かれて歩いているように見えたことだろう。

川幅が随分広くなってきた。もう向こう岸も霞んで見えない。僕はふと、このまま歩き続ければやがて海にたどり着くのだろうか、と思った。

いつか御座山の頂上から見た、彼方に光る海を思い浮かべていた。不思議に心が温かくなった。こんな感覚も久しぶりだ。

「もし海にたどり着いたら」
と、僕は心に浮かんだことを、独り言のように口に出した。

「伽耶子のお祖母ちゃんが、海の向こうから迎えに来てくれるかも知れないな……」

伽耶子はもちろん答えない。だが僕はこの考えが気に入った。

母でも父でもなく、祖母が迎えに来てくれるのをずっと待っていた伽耶子。その理由も、僕はとうに知っていた。

海を目指そう、と思った。どうせ時間は永遠ともいえるだけある

のだ。

僕たちはいつか海にたどり着けるだろう。
もし伽耶子のお祖母ちゃんが迎えに来てくれなくても。
そのときは僕が伽耶子を連れ、海に漕ぎ出してもいい。
伽耶子の望むところまで。いつかふたりが海のひとしずくにな
るまでもいい。伽耶子と、一緒に。

そのとき。

何か、ひどく懐かしい声を聞いた気がした。

僕は我に返り、周囲を見渡した。

ミャー

今度ははつきりと聞こえた。猫だ。甲高く、仔猫が親猫に甘える
ときのような声。僕はその声に聞き覚えがあった。

やがて黒い小さなケモノが草むらから姿を現した。

「……みゃー！」

自分でも驚くような大きな声が出た。あの日、祖母の家の玄関で
僕を見送った黒猫だ。雄のクセにやたらにかわいい声の持ち主で、
ついた名前も「みゃー」だった。

黒猫は人懐っこく僕の足元にじゃれついた。僕はそれを抱き上げ
た。懐かしく確かな重みと温みがそこにあつた。黒猫はぴくりとヒ
ゲを動かすと僕の腕からすとんと降りた。そしてもう一度ミャーと
鳴くといつと離れ、僕を振り返った。

「……………」

僕にはわかった。みゃーはついて来いと言っているのだ。だが僕
は動けずにいた。また僕は伽耶子を裏切るのか……今僕は 伽耶
子と行こうと考えたばかりなのに。

行っつていいよ

伽耶子の声がした気がした。

僕は思わず振り返った。伽耶子は表情もなく、ただ無言でそこに立ち尽くしていた。

「伽耶子」

名前を呼んでも、答えが返る訳もない。伽耶子の姿が滲んだ。

「ごめん、伽耶子……」

再び小さくみゃーの声がした。向き直ると、みゃーはもう随分と遠くへ行ってしまっていた。

僕は再び伽耶子を見た。どんなに目を凝らしても、目の前の伽耶子にかつての面影を見出すことはできない。だけと思いい出の中の伽耶子は、今でも可憐で清楚な一輪の花だ。

小学生の頃の、いつもひとりで教室にいた姿。内緒だよと言って、僕にだけ名前の秘密を教えてくれた。再会したときの、あの嬉しさ。手を繋ぎ花を摘んで一緒に歩いた。僕たちにはこの国で、確かに分かちあった時間があり、通いあわせた心があった。

たったひとり、この黄昏の国で僕を待ってたと言った。

伽耶子 僕は。

「ごめん……！ ごめん……」

涙が溢れた。僕は駆け出した。

やはり僕は生きたい。今生の世へ戻りたい。冷淡でも情けなくとも身勝手でも、僕は。

僕は振り返らなかつた。伽耶子はどんどん小さくなりながら、それでもいつまでも僕の心の中に佇んでいた。

小さなみゃーは時折僕を確かめるように振り返りながら、少し前を歩いていく。ぼくはただびんと尾を立てたみゃーの後ろ姿だけを見つめ、見失わないよう必死でついていく。

行く手は徐々に暗くなり、やがてすっかり闇に閉ざされて、みゃーの姿もほとんど見えなくなった。

「みゃー、みゃーどこだ？」

ひとりではこの闇の中は歩けない。泣きそうになりながら名を呼んだ。振り返ることはしなかった。振り返ってもそこにすでに道はないのはわかっていた。

ふと傍らに気配を感じ、僕はそちらをおそるおそる盗み見た。

そこにいたのは若い男　いや、若い男の姿はしているが、川辺の渡し場にいた老人と同じ、人ならざる何かだった。それは黒っぽい服を着込み僕と並んで歩いていて、銀色に光る大きな瞳で前を見据えたまま、僕に片手を差し出した。

ためらいがなかったわけではない。だけど僕にはすべてを押し包む漆黒の闇の中、ひとりで立っている気概はとうていなかった。僕はさすがのようにその手を取った。

その掌は大きく厚く温かく、僕に安心をくれた。すでにそれも闇に溶け込もうとしていた。瞳はなおも銀色の光を放っていたが、それすら闇に呑み込まれるのも時間の問題だろう。長く伸びたその爪が食い込むのを気にもかけず、僕はその手を強く握った。手の中の温もりと痛みだけを恃みに、僕は漆黒の中をただ歩き続けた。

その闇をいつ、どうやって通り過ぎたのか、僕は覚えていない。気がつくと僕は祖母の家の前にいた。

目眩がしそうに明るい昼下がりであった。気温は高く、長袖のシャツの下はべったりと汗で濡れていた。

雑草が茂り放題の手入れのなっていない庭と、見慣れた古びた玄関。僕は引き戸を開けた。三和土を上がった廊下の隅には、いつものようにみゃーの茶碗が置いてある。それはなぜだか伏せられていて、その下に紙切れが挟んであった。ふと興味を惹かれ、僕はこれを広げて読んだ。

立ちわかれ　いなばの山の　峯におる　待つとしきかば　今帰り

こむ

どこからかみゃーが現れて、例の甘えた声で鳴きながら僕の足にじゃれつき、額を擦りつけてきた。

「竣介……！」

みゃーの声に気づいたのか、廊下の奥の襖がひらいて顔を出したのは母だった。

「母さん……？　なんで、ここにいるの……？」

「なんでって、あんたは……！」

母は狭い廊下を転がるように駆け寄ってくると僕を抱きしめ、揺さぶった。母は泣いていた。

「あんたは、もう……！　どれだけ心配したか……！」

「……え……と、……あの……」

母の激しい反応に戸惑っていると、奥の座敷から、祖母も出てきた。今度はその足元にじゃれついたみゃーを抱き上げると

「お帰り、みゃー。ご苦労だったね」と頭を撫で、僕にも

「お帰り、竣介。よう帰ってきた」と言った。

「……ただいま」

そう口にする、ああ、帰ってきたんだな、という実感が湧いた。僕は何処か、遠いところを旅してきたのだ。そしてみゃーに連れられここに帰ってきた。

僕は息を大きく吸い込んだ。

「ただいま、お祖母ちゃん、お母さん」

もう一度、そう繰り返した。

終章

その日、夜には父も来た。あの国では時間も曖昧だったから、僕は長くてもひと月ほどのことかと思っていたが、実際は三月ほども行方不明だったらしい。

夜から原因不明の熱が出て、僕は十日も寝込んだだろうか。祖母は薬の代わりに、薄い紙に何やら書き付けてあるものを細かく切つて僕に飲ませた。普段ならそういうことをひどく嫌がる母が黙っていたのが不思議だったけど、熱が下がった後に母がしてくれた話に納得がいった。

僕が行方知れずになり、両親が祖母を責め互いを責め、最後には自分たち自身を責め始めた頃のこと、みゃーが祖母の夢に現れ、「竣介を連れて帰るから」と言ったのだという。その日からみゃーは姿を消した。元々気まぐれな雄猫、母は祖母の言うことなどまるきり信じてはいなかったが、それでもどこか、藁にも縋る思いがあったのだらう。みゃーが僕を連れて無事に戻るようにと、祖母に教えられて呪いをしたのださうだ。みゃーの茶碗の下にあったあの和歌は、猫返しの呪文だった。

帰ってきたと思っただけで熱を出して寝込んだりして、結局僕の復学は夏休み後、二学期になってからだだった。多分それもよかったのだらう、心配してであれ興味本位であれ、失踪中のことについてとかよく聞いてくる者がそう多くなかったことは助かった。問われても答えようもないからだ。

僕は両親、そして祖母にさえ、僕があの世界で見聞きしたことは話さなかった。もちろん伽耶子のこと、誰にも……。

僕はゆっくりとこの世界へ、日々の生活へと戻っていった。

最後にその後についても、簡単に記しておこうと思う。

両親は結局別れた。僕の「事件」のあと、ふたりは良好な関係を取り戻したかに見えたが、やはりそれは有事に於ける一時的なものであつたらしい。一度壊れてしまった関係は、多分そう簡単に修復できるものではないのだろう。

僕は大学入学を機に家を出、それ以来気ままな独り暮らしを続けている。

あのとき僕を迎えに来てくれたみゃーは、とつくに猫の国へと帰った。祖母もすでに泉下の人となり、古ぼけたあの小さな家があつた辺りは今は幹線道路が走っている。

僕はあれからも長い間、人知れず咲いている山吹を見つけると時々潜っていた。だが二度とあの世界は現れなかった。

何年か前、唐突に母から電話がかかつてきたことがあつた。

御座山が宅地造成のために崩されたのだが、そのとき小さな子供が骨が出てきたという話だつた。十歳前後の女の子で、鑑定の結果では死後もう三、四十年も経っているらしい、と言つた。

母は多分、その話を聞いたとき、僕がその子のようにならなくてよかつた……、と心底思つたことだろう。息子が小学生だつたとき、突然失踪した同級生クラスメイトがいたことを思い出したかも知れない。

母のとりとめのない話を聞きながら、僕は伽耶子のことを考えていた。

伽耶子もようやく、帰つたのだと思つた。骸はこの世に、そして魂は川の向こうへと。

もう山吹の花の下を潜ることもない……。
そう思つた。

山吹の花が咲くところには幽界への入り口がある、と聞いたのはつい最近のことだ。だがあの花を潜らずとも、生きとし生けるものはすべてがやがてその門に至るのだ。

それが一年後か二十年後か、あるいは明日なのかは誰にもわから

ない。人生が旅ならば、それはその門に向かってただ歩き続けるものなのだろう。出会っては別れ、美しい風景もやがてはゆき過ぎる。その儚さはかつて僕が迷い込んだあの黄昏の国の、心許なく揺らめいた風景となら変わるところはない。

伽耶子を見捨て、ひとりでこの世に戻ってきたのだという忸怩たる思いは、小さく滲んだ伽耶子の姿と共にずっと僕の心の奥底にあった。あるとき僕が聞いた伽耶子の声はただの僕の願望で、本当は伽耶子はいつまでも僕に側にいて欲しかったのかも知れないと、ずっとそう思い続けてきた。だがいずれ山吹の門へと僕も辿りつくのなら、そうしたことを気に病むこともないのだろう。僕もまた、やがて川の向こう、大いなる海のひとしずくへと還っていくひとりなのだ。

了

終章（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

改稿というのは本当に難しいですね。足りない部分は当然補うとして、その他はばっさり枝葉を整理するつもりでしたが、いざ始めてみると、むしろつけ足すことばかりが多かったように思います。

ただ、手前味噌ではありますが、主人公竣介の心情は初稿よりも細やかに書き込めたのではないかなと……

少しばかり感傷過多な部分は否めませんが^^；

年若い方とある程度の年齢を迎えた方では、この話の読後感は違うのではないかと思っています。

お気軽にひとこと感想などお聞かせいただけると嬉しいです。

10・06・04 あんのーん拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6354/>

改稿・山吹の門

2010年10月8日14時48分発行